

史跡旧二条離宮（二条城）

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび消防用防火槽設置工事に伴います史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成14年11月

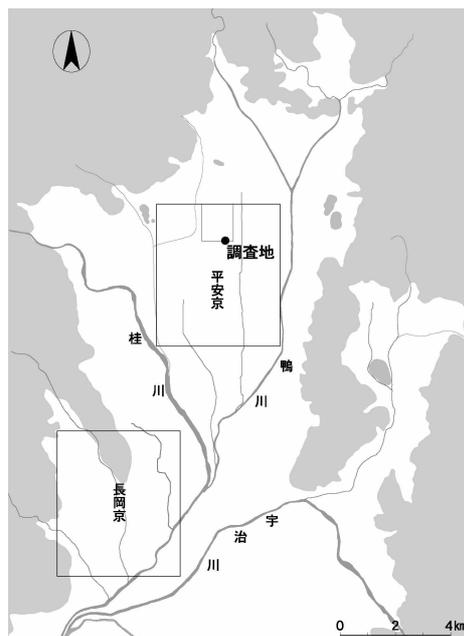
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）
- 2 調査地点所在地 京都市中京区二条通堀川西入二条城町
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2002年9月2日～2002年9月27日
- 5 調査面積 81m²
- 6 調査担当職員 南出俊彦
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の土器類・石製品に通し番号を付けた。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 作成担当職員 南出俊彦

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	2
3. 遺 物	4
4. ま と め	5

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	調査前全景（北から）
		2	調査状況
図版 2	遺構	1	第3面全景 平安時代（東から）
		2	柱列（南東から）

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：5,000）	1
図 2	遺構平面図（1：200）	2
図 3	北壁・東壁断面図（1：80）	3
図 4	出土遺物実測図（1：4）	4

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	4

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査経過

本調査は、二条城内での防火水槽設置工事に伴う発掘調査である。調査地は、本丸の西堀と二条城西外堀とに挟まれた北土蔵と南土蔵との中間点、遊歩道の東側、休憩所の南側である。

二条城内では、これまでに城内の東側および北側で10次にわたる発掘調査が行われており、それぞれに重要な成果を上げている。

本調査地では、一昨年に試掘確認調査が実施され、江戸時代の整地層、平安時代と考えられる溝状遺構や礎敷遺構などを確認している。また、調査区西端には平安宮侍従所西面築地が想定される。今回の調査は、この成果に基づいて江戸時代、平安時代の調査を行うと共に、この地域の中世から近世初頭の状況を把握できる手掛かりを得ることを目的とした。

調査は、9月2日から重機を用いて表土を除去し、江戸時代の整地層上面から調査を開始し、近世初頭、中世、平安時代の遺構を調査した。調査最終段階に北・東壁際で計3箇所の断割り調査を行い、自然堆積層の状況を記録した後に、調査区を埋め戻し、9月27日にすべての調査を終了した。

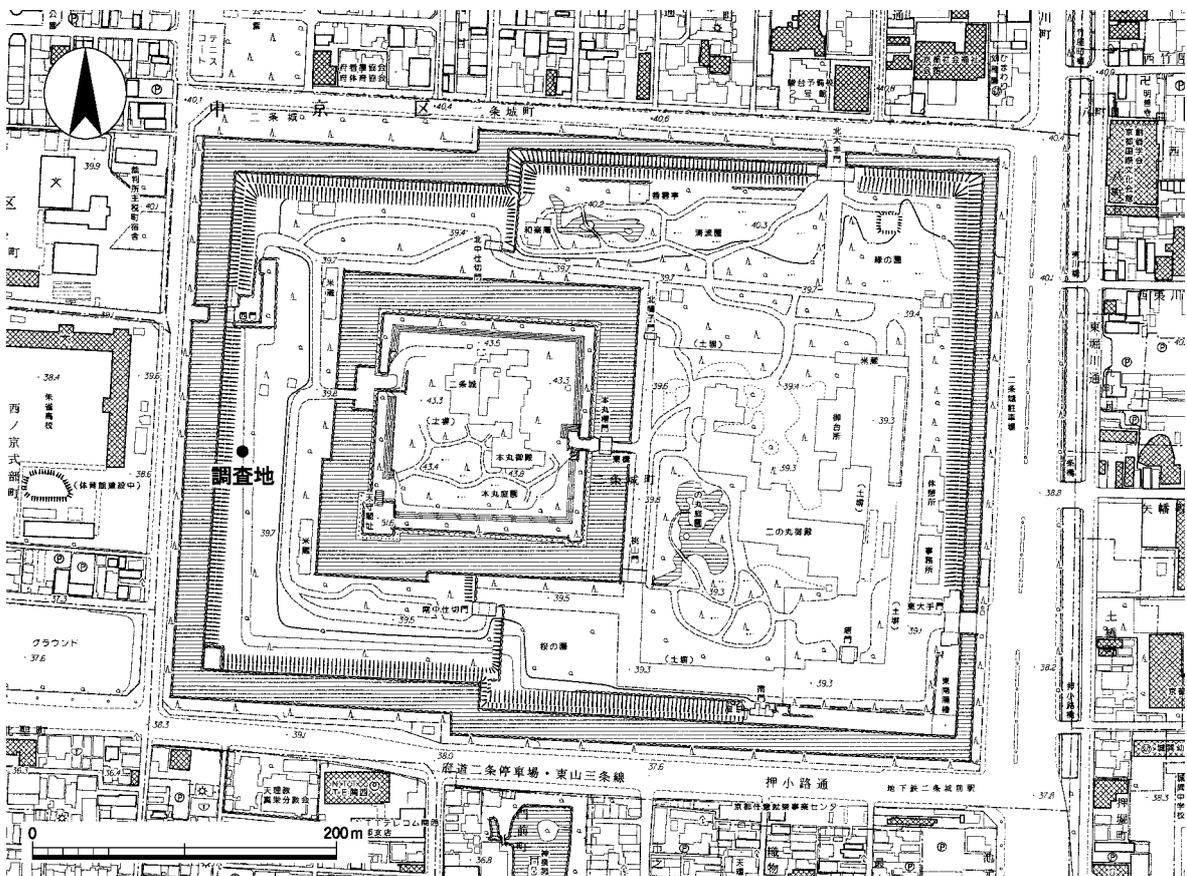
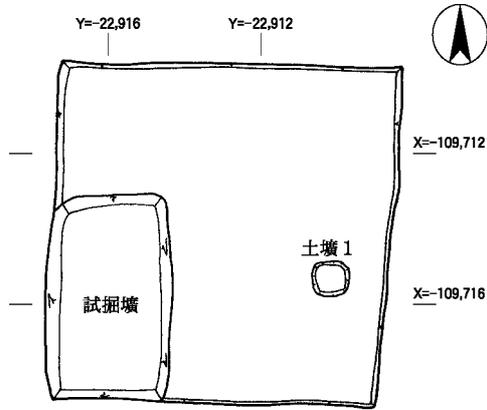


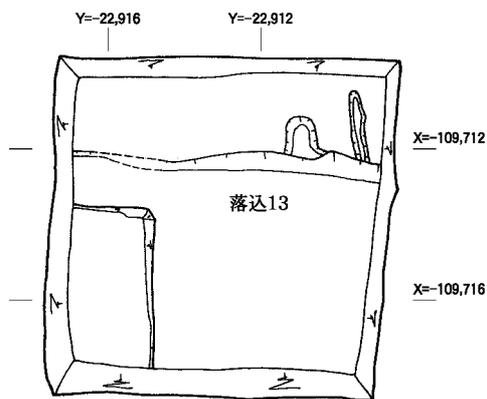
図1 調査位置図(1:5,000)

2. 遺 構

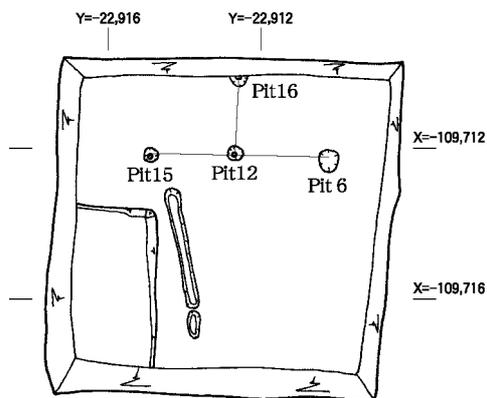
調査地の基本層位は、表土が現地表面から下に20cm前後堆積し、以下灰黄色砂泥（2.5Y6/2）、



第1面（江戸時代）



第2面（室町時代後半から近世初頭）



第3面（平安時代後期）



図2 遺構平面図（1：200）

黄褐色砂泥（10YR5/6）が140cmの深さまで堆積している。江戸時代に行われた整地である。この整地以下は褐灰色砂泥（10YR5/1）、灰色砂泥（7.5Y4/1）にぶい黄褐色泥土（10YR4/3）+ オリーブ褐色泥土（2.5Y4/3、自然堆積層）である。褐灰色砂泥・灰色砂泥は中世の遺構面、平安時代の遺構は自然堆積層上面で成立している。現地表面から自然堆積層上面までの深さは150cmである。

第1面（江戸時代）

江戸時代の整地層の厚さは120cm前後あり、調査区の全面にわたっている。

江戸時代の遺構には土壇1がある。平面形は長辺95cm、短辺90cmの方形を呈している。土壇底には、円形の板（11枚の部材を用いて円形としている）と、その板の周囲を巡る縦板材が部分的に残存していた。この痕跡は、桶状の入れ物と想定しており、トイレ遺構と考えている。

第2面（室町時代後半から近世初頭）

江戸時代の整地土を除去すると小規模な溝を検出した。近世初頭の耕作に伴う溝と考えている。

落込13は室町時代後半代に行われた整地で埋められている。

第3面（平安時代後期）

平安時代後期の遺構にはPit 6・12・15・16などがある。

Pit 6は長径65cm、短径50cm、深さ20cmである。

Pit 12は径40cm、深さ32cm、柱あたりの径は10cmである。

Pit 15は径45cm、深さ30cm、柱あたりの径は10cmで、柱あたりの底には柱が沈まないように根石が置かれていた。

Pit 16の北半は調査区外であるが短径40cm、長径20

cm以上、深さ25cm、柱あたりの径は10cmである。

Pit 6・12・15の間隔は2.4mで東西方向に並んでいる。またPit12・16の間隔は2.1mで南北方向に並ぶ柱列である。

表1 遺構概要表

時期	遺構
江戸時代	築地層、土壇1
室町時代後期	溝込13、溝
平安時代後期	Pit 6・12・15・16

調査の最終段階で平安時代以前の遺構の調査を行ったが、遺物を含まない自然堆積層を確認するにとどまった。

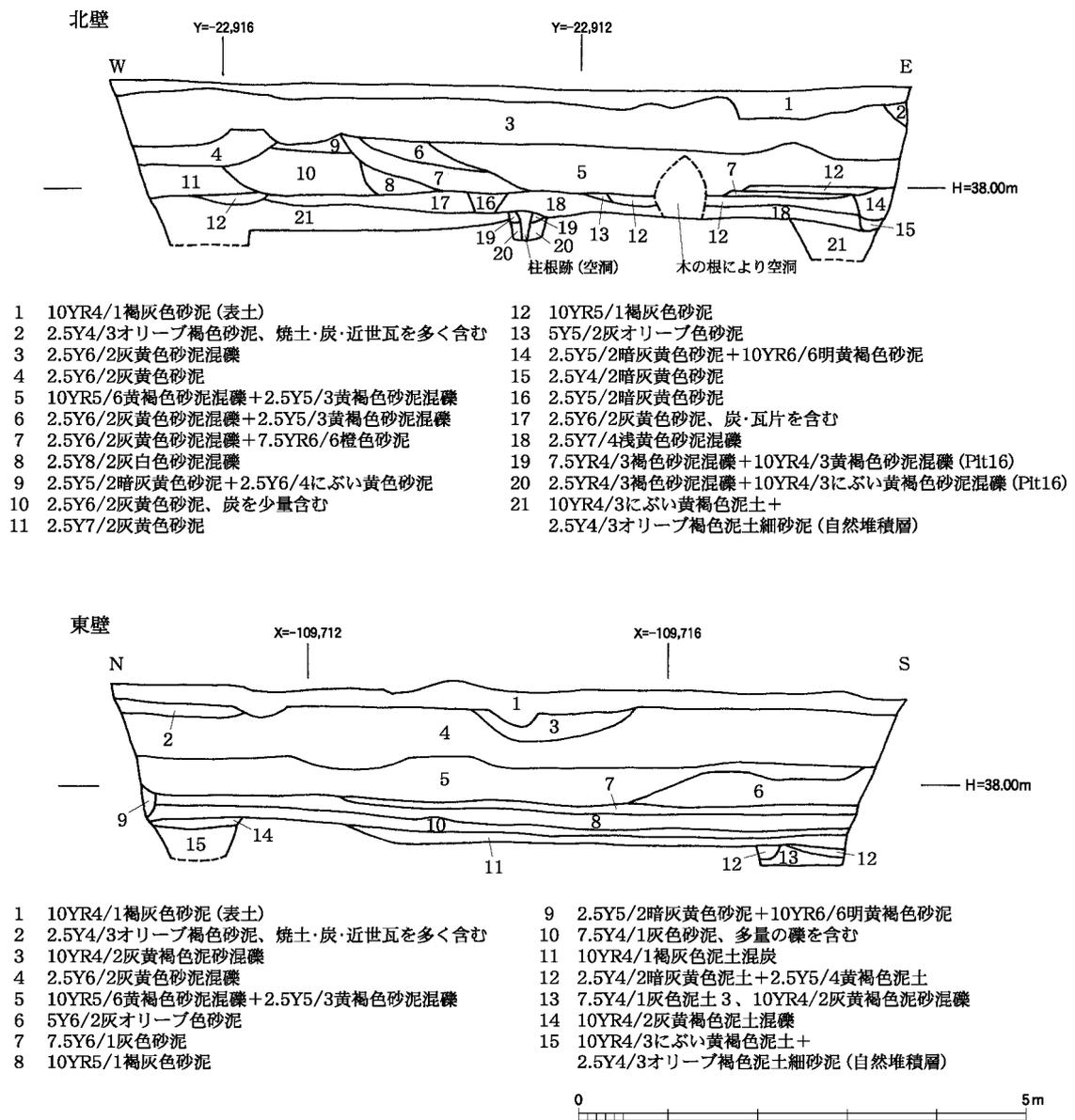


図3 北壁・東壁断面図(1:80)

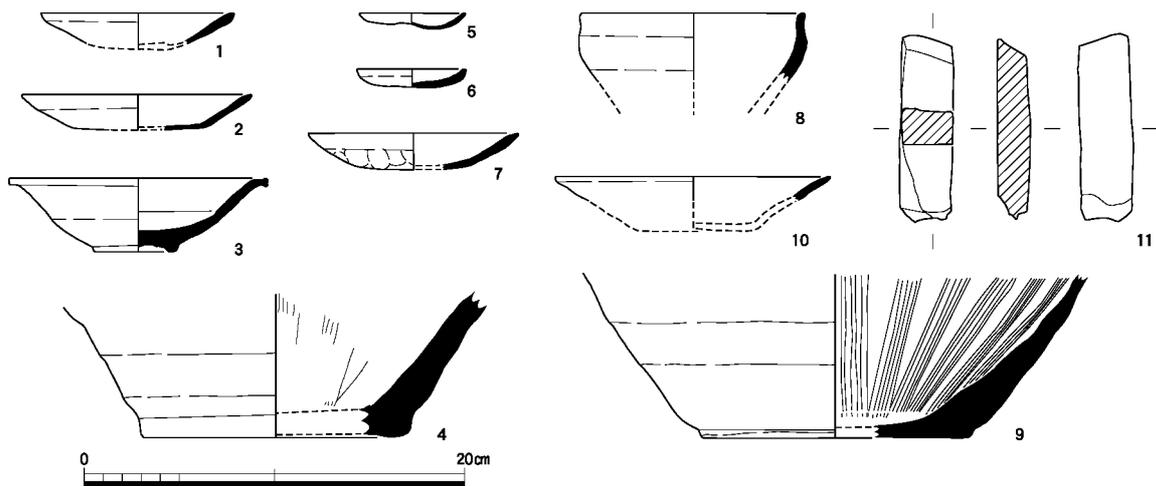


図4 出土遺物実測図(1:4)

3. 遺物

調査で出土した遺物は土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、木製品、石製品、銭貨などである。

江戸時代の整地層からは土師器(1・2)、施釉陶器(3)、焼締陶器(4)、染付、瓦などが出土している。1・2は土師器杯である。桃山時代末から江戸時代初頭のものである。3は唐津碗である。素地の色調は明赤褐色、釉薬は灰白色を呈している。見込底部にメアトが4箇所認められる。釉薬は刷毛塗りで施されている。4は播鉢である。櫛目は4本を一単位として施している。

土壌1からは、土師器(5~7)、施釉陶器(8)、焼締陶器(9)、瓦などが出土がしている。瓦の中には布目が施されたものがある。5~7は土師器杯である。5・6は口径約5cmの小さなもので、手づくねで成形している。これらは江戸時代中期頃に属するとみている。8は美濃碗である。素地の色調は灰白色を呈している。釉薬は鉄釉を漬け掛けしている。江戸時代前期から中期のものである。9は播鉢である。櫛目は6本を一単位として施している。底部に見られる櫛目は三角パターンとみられる。

落込13からは土師器(10)、瓦器、焼締陶器、石製品(11)などの他に、北宋銭「熙寧元寶」

表2 遺物概要表

時代	内容	ゴテンナ 箱数	Aランク 点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
江戸時代前期	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦		土師器5点、施釉陶器2点、焼締陶器2点		
室町時代後期	土師器、瓦器、焼締陶器、瓦、銭貨、磁石		土師器1点、磁石1点		
平安時代	須恵器、反形陶器、瓦				
計		8箱	11点(1箱)	6箱	0箱

(初鑄1068年)が1点出土している。11は砥石で、1面は欠失しているが、残り5面に使用痕が認められる。10は土師器皿である。室町時代後半代に属するものである。

Pit16からは須恵器、灰釉陶器、瓦などが出土しているが、いずれも小片で、平安時代のものがある。

4.まとめ

今回の調査では江戸時代の整地作業の様子、この地域での中世および近世初頭の状況、平安宮内の侍従所関連施設の確認、平安時代以前の状況把握などを目的にあげ、調査に臨んだ。その成果を以下に述べる。

寛永三年(1626)に3代将軍家光の命による二条城の拡張工事が完成するが、その時の整地層を確認した。この整地層は、厚さ120cm前後で、調査区全域に認められた。

近世初頭と中世の状況は、旧地形を整地した跡(落込13)や小規模な溝を検出していることから、この頃に周辺を整地し、耕作地としたことが推測される。

平安時代は、柱列を確認したことは大きな成果であったが、調査区が狭小であったため全体像をつかむには至らなかった。ただし、調査区西端には平安宮侍従所西面築地が想定される位置にあり、この柱穴群が侍従所と関連するものか、西面築地に関連するかは不明であるが、平安宮の変遷を考える上では重要なものとなる可能性がある。

平安時代以前の状況は断割り調査を行ったが、自然堆積層を確認するにとどまり、遺構・遺物を検出することはできなかった。

以上のように、当調査区での変遷を辿ることができたが、調査成果のさらなる拡大を図るためにも、周辺地域の調査を継続的に実施することが重要である。

参考文献

菊池京子「「所」の成立と展開」(林陸朗編『平安王朝』論集日本歴史3 有精堂出版株式会社 1976年)

藤本邦彦「侍従所」((財)古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典 上巻』角川書店 1994年)

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-13							
編集者名	南出俊彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年11月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 きゆうにじょうりきゆう 旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちょう 二条城町	26100	A453	35度 00分 38秒	135度 44分 56秒	2002年9月 2日～2002 年9月27日	81m ²	消防用防 火槽設置 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡 旧二条離宮 (二条城)	史跡	江戸時代	整地層・土壇	土師器・施釉陶器・焼 締陶器・染付・瓦				
		室町時代後期	落込・溝	土師器・瓦器・焼締陶 器・瓦・銭貨・砥石				
		平安時代後期	ピット	須恵器・灰釉陶器・瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-13

史跡旧二条離宮（二条城）

発行日 2002年11月29日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961